

血脇守之助「次回国際歯科医学会議を日本に開催せんとする希望に対する意見書」(昭和6年2月)について^{*1}

加 来 洋 子 山 口 秀 紀 石 橋 肇
渋谷 鉦 谷 津 三 雄^{*2}

要旨：第9回1936年(昭和11年)FDI(国際歯科聯盟)の開催招致について、血脇守之助「次回国際歯科医学会議を日本に開催せんとする希望に対する意見書」(昭和6年2月)の資料をもとに考察を加えた。中原市五郎が歯科医学校を中心とした教育機関から招致の提案運動をしたが実現しなかった。その理由は、本資料から当時の日本歯科医師会会長であった血脇守之助が反対したためと思われる。
キーワード：第9回国際歯科聯盟大会、日本歯科医師会、血脇守之助、中原市五郎

Summary : It was examined about the holding invitation movement the ninth Federation Dental International convention in 1936 (the 11th year of Showa) from “the Opinion book to the hope to want to hold the next FDI in Japan” written by Morinosuke Chiwaki.

Ichigoro Nakahara developed an invitation movement from the educational facilities of dentist school, but Morinosuke Chiwaki of Japan Dental Association chairman opposed. As that result, we considered that FDI holding wasn't realized.

Key Words : The ninth FDI convention, Japan Dental Association, Morinosuke Chiwaki, Ichigoro Nakahara

I. はじめに

国際歯科医学会議 International Dental Congress : IDC は、世界各国における代表的歯科医師団体の連盟として設立され、その第1回会議は1889年パリで開催された。4年後の1893年には第2回会議がシカゴで行なわれ、1900年パリで行なわれた第3回会議からは、その恒久母体である国際歯科連盟 Federation Dental International : FDI として開催されている。草創期において、第4回は1904年セントルイス、第5回1909年ベルリン、第6回1914年ロンドン、第7回1926年フィ

ラデルフィア、第8回1931年パリ、第9回1936年ウィーンと約4~5年おきに開催されている。

この間、1931年に日本において次回第9回大会を開催される機運があったが、結局開催には至っていない。この点に関して「次回国際歯科医学会議を日本に開催せんとする希望に対する意見書」(血脇守之助)を参考資料として考証を加えた。

II. 研究資料

本意見書は今田見信氏より日本大学松戸歯学部資料室に寄贈されたもので、大きさ22.4 cm×15.2 cm大、全10ページからなる小冊子である(図1)。表紙には「昭和六年二月」(「以印刷代謄写」)「次回国際歯科医学会議を日本に開催せんとする希望に対する意見書」とあり、著者は「国際歯科連盟常任理事会員、国際歯科連盟日本代表者、日本歯科医師会々長 血脇守之助」と記されてい

^{*1} “The Opinion Book to The Hope to Want to Hold the Next Federation Dental International in Japan” Written by Morinosuke Chiwaki

^{*2} Yoko Kaku, Hidenori Yamaguchi, Hajime Ishibashi, Koh Shibutani and Mitsuo Yatsu

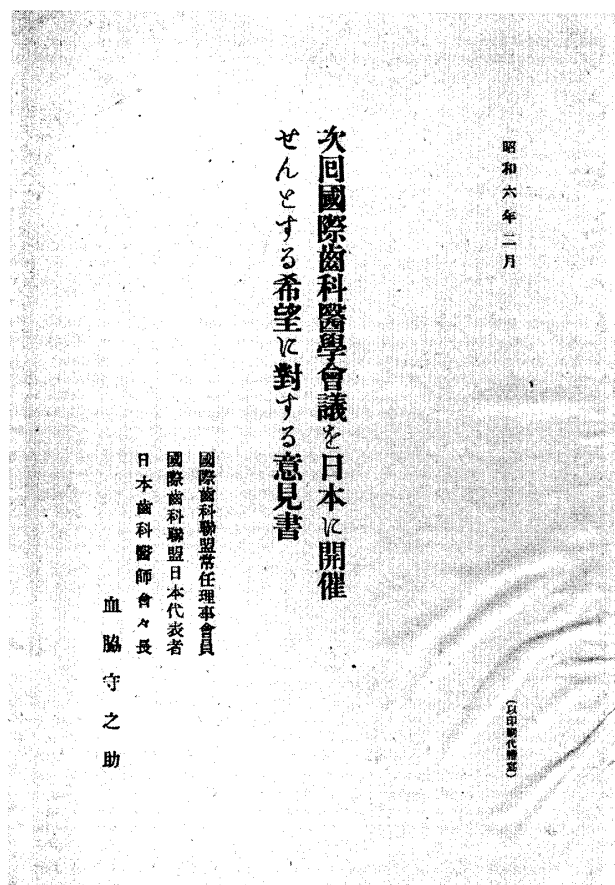


図 1

る。

III. 内容および考証

本書は前置きなしで始まっている。冒頭は「本年二月七日附けを以って中原市五郎氏より次回即ち昭和十一年に開かるべき（第九回）国際歯科医学會議を日本において開くことを，中原氏の主宰する学会に於いて決議したから其相談をするために参集を乞う旨の来信がありました。私は其申出の唐突なるに驚いたのですが兎も角も事情を承るため二月十四日富士見軒に代理者を出席致させました所，その会は歯科医学校当事者を招待したもので，その席上では大体に於て中原氏の申出を承認し更に人数を増して三月十日に第二回会合を開くことに申し合わせたさうであります。私はこの大きな仕事殊に斯様な国際的の会合を日本に開くという運動に対して，国際歯科医学會議 International Dental Congress の恒久母体たる国際歯科連盟 Fedaration Dentaire Internationale (F. D. I) の常任理事会 Executive Council の一人として，同連盟日本代表者として，且つ日本歯科医師会会長として之を黙過することが出来ませぬので茲

に同連盟の性質を述べ，併せて今回の運動に対して自己の意見を發表することが私の責任であろうと思ふのであります。」と書かれ，国際歯科連盟常任理事会の日本代表者および日本歯科医師会々長職からの意見であるということを強調している。

本文中において，中原が希望した次回 FDI 日本開催に対して，血脇は自らの立場から幾つかの反対意見を述べている。

先ず FDI 常任理事会員，同日本代表者の意見として，1) FDI の開催日時，場所は FDI 連盟常任理事会が決議するものであり，2) もし日本開催の申出をする場合でも，日本における常任理事会員および会員全体の同意はもちろん，総ての歯科医師団体の同意と援助が必要であると述べている。特に「…日本に於て開会するという様な申出をするに就ては日本に於ける常任理事会員及会員全体の同意は勿論，総ての歯科医師団体の同意と援助を要する次第でありまして，歯科医学校当事者の決定すべき関係にあるものではありません。」と，中原氏が召集した歯科医学校当事者，すなわち教育機関関係者が決定すべき関係にはないことを述べている。

さらに，文章は次のように続けられている。「今回の運動に就て考へて見るに発議が余りに軽々しく行はれ，殊に重大なる関係にある歯科医師会が第二会合に於ても無視されているという事を全国歯科医師会員と共に甚だ遺憾とするものであります。若し歯科医師会は学術に関係なきものであるといふ様な考へを持っている人があるならばそれは余りに浅見であります。又国際歯科連盟或は国際歯科医学會議といふものは所謂研究発表，所謂学理探求という様な狭い意味に依て成立しているではありません。今若し同連盟の常置する委員会が如何なるものであるかを我々が考えて見たならば其の疑問は容易に氷解せらるであります。即同連盟には第一に歯科教育委員会 Commission of Dental Education (日本委員血脇)，第二には法制委員会 Commission of Legislation (日本委員血脇)，第三は赤十字委員会 Commission of the Red Cross (日本委員島峰徹氏)，第四に文書委員会 Commission of Documentation (日本委員遠藤至六郎)，第五は歯科衛生委員会 Commission of Dental Hygiene (日本委員寺尾幸吉，遠藤至六郎両氏)，第六に科学研究委員会 Commission of

Scientific Research (常任理事奥村鶴吉, 日本委員花澤鼎両氏), 第七には歯科出版委員会 Commission of Dental Press (日本委員血脇), 第八に陸海軍歯科医務委員会 Commission of Army and Navy Dental Service, 第九には術語委員会 Commission of Terminology と斯く種々なる委員会が設けられているのであります。若しも現代日本に於て歯科医師会を目するに単なる或いは狭義なる医制上の団体として考へる様な人があるとしたらそれは余りにも日本の実情に暗き人であります。極めて直接的に考へて見ましても歯科医師会の学術部が現に如何に活躍しているかを吾々は見逃すことが出来ませぬ。更に国際的に之を見れば国際歯科連盟が常に日本歯科医師会を相手として諸般の交渉を続けて来たのは当然のことであります。…今日に於て学術の研究を学校や教室の専有物なりと考える様なものがあれば, それは全く時勢を諒解せざる短見であります。歯科臨床家の間に於ける幾多の豊富なる経験, 立派なる研究を等閑に附し歯科医師会を除外して斯様な国際的の大きな仕事が為し得ると考へることは日本現在の歯科医界の実情を解せざる浅見であります。」

歯科医師会を無視して事が進みつつあることに皮肉を込めた表現である。日本歯科医師会が無視されていることが, 繰り返し強く反対理由として述べられている。

さらに, 血脇自身も国際的会合の開催を希望している一人であると前置きしながら, 昭和 11 年に開催することは国内情勢から困難であるとし, その理由を「…今や我国は建国以来未曾有の経済困難に際し我が歯科医界の経済的難局は昨年後半期以来殊に深刻を加え, この快復が短日月に行われ様とは容易に考へることが出来ぬ有様で我々は今や歯科医産業経済の建直しに直面して一方ならぬ苦労を重ねつつある次第であります。前記の歯科医学校当事者の会合に於ては会員から十萬円の会費を徴収して会議の費用に当てようという提議が申合されたそうではありますが, 恐らく之れだけでは, 尚ほ多くの不足を感じるに到ることは明瞭であります。」

このように, 当時は世界大恐慌に端を発した, 日本の経済的困窮性と, それによる日本歯科界の経済的難局をあげている。都市部での歯科医師の過剰問題¹⁾や, 東京府で行われた施療券や実費診

療所問題などが噴出していた時代でもある^{2,3)}。また, 中原氏の提案では, 歯科医学校当事者から, 10 萬円の会費徴収を行なうことになっているが, それだけでは運営が不可能であり, この不況のなかで多くの資金を徴集することは適當ではないことを切々と述べているのである。また, 「…日本の学者が国際的会合に進出したのは大正十五年フィラデルフィアに於ける会議に於て数名の学者が研究業績を発表したのが過去に於ける最も著明な事実であると…」とし, 当時の世界における日本の学術的国際関係が未だ希薄であったことも反対の理由として述べている。続けて, 「…私は国際会合を開くには未だ適當な時機に達していないと思ふのであります。然し斯く申したとて私は昨年ブラック博士来朝の砌に唱えられた一部の論議の如くに日本は立派な専門学術を持っているから, 敢えて外国からの知識を必要としないなどという様なそんな浅い狭い考えを抱いているものでないことを茲に附言して置きます。」と, 日本における歯科の国際化を決して否定しているのではないことを押さえて記述している。

一方, 血脇は中原の提案に対して, 国際会議開催に積極的な意見提案もしている。

内容を要約すると, まず, 第一に国際歯科医学会議の前に極東あるいは汎太平洋歯科医学会議を開催してはどうかということ, 第二に, FDI の開催は第十回を選び, 昭和十五年 (1940 年) に開催することがあらゆる点からみても時期を得たものであるということを, 以下の理由によるとしている。

- 1) 第一回万国博覧会が開催されること
- 2) イーストレキ氏来朝八十年, エリオット氏来朝七十年であること
- 3) 小幡英之助が自ら進んで歯科試験を出願し, 歯科医師免許制度の基礎を築いてから六十五年目にあたること
- 4) 初めて東洋に歯科医学校が設立されてから五十年目にあたること
- 5) 歯科医師法が公布されてから三十五年であること
- 6) パリで第一回国際歯科会議が開催されてから五十年にあたること
- 7) 国際歯科連盟創立より四十年にあたること
- 8) そして何より日本建国 2600 年に相当する

こと

なお、巻末の追記の中には、本意見書は各歯科医学校、各歯科学会、各歯科学教室、各病院歯科部、各歯科新聞雑誌社およびすべての歯科医師会に発送されたことも明記されている。

これまで、第9回のFDI開催を日本に招致する件に関して、加藤⁴⁾は「特筆すべきことは日本歯科医学専門学校々長であった中原市五郎先生が漸く日本における歯科界は、国際歯科医学大会を日本に招致し得る状態になったので、昭和6年(1931)1月30日、中原校長は第9回国際歯科医学大会を日本に招致すべき相談会を開き、又2月14日麹町区富士見軒に中原校長の名を以て東京歯科ほか全国8校の代表者の参集による会合を開き、協議の結果、5年後(昭和11年日本に於て国際歯科医学大会を開催、その2年前にFDI)に開催することが決議された。この主旨にもとづいて、更に3月10日、各歯科医専校長と、口腔病学会(島峰徹)をはじめとして、全国の歯科学会の代表者及び東大歯科(都築正男)をはじめ全国14の歯科部長を日本教育会館に参集してもらって、FDI及び国際歯科医学大会の招致に対して協力方を要請したところ満場の賛成を得たが、時代背景の立場で、おそらく軍部の関係から政府の許可が得られず実現に至らなかったが中原市五郎の努力は高い評価として今日においても歯科界に伝承されており深く敬意を表すところであります。」と述べている。また、森山⁵⁾はこれらの経緯について、中原市五郎を中心に行われたが血脇らの時期尚早の反対意見もあったと報告しているが詳細については述べられていない。

開催されなかった理由は、時代背景から時局と軍部による圧力もあっただろうが、その主な理由は、今回の資料からみると日本歯科医師会々長である血脇が、中原の提案に対して反対したという史実がみてとれるのである。中原市五郎は第8回万国歯科医学会(1931年パリ開催)に政府代表の島峰徹また花澤鼎、斉藤久、山口秀雄、鈴木萬年らとともに参加している⁵⁾ことから、FDIの開催についてアドバルーンをあげたのに対して、当時の歯科医師会々長の血脇守之助が飛びついたようである。中原が歯科医学校を中心に教育

機関から呼びかけた提案に、歯科医師会々長血脇が待ったをかけたのではないかと想像される。周知のように両氏は日本歯科界の黎明期の両巨頭であり、中原市五郎(1867~1941)、血脇守之助(1870~1947)は正に同世代、永遠のライバルだったことは想像に難くない。

榊原⁶⁾は1922年(大正11年)10月7日、東京築地の精養軒で行われた歯科関係10団体の集まりでの中原市五郎の挨拶について「…私は血脇君とこのような席に並んだことは15年ぶりであります。私と血脇君とは恰も隅田川のボートレースのように、お互いに競漕してやってきました。」と引用し、中原—血脇の抗争のなか注目を集めるものであったと述べている。

血脇守之助は1919年(大正8年)に日本聯合歯科医師会々長職につき、実に28年間勤め1946年(昭和21年)に退いている。まさに、血脇守之助、還暦直後、全盛期の意見書である。

IV. まとめ

草創期におけるFDI、特に第9回大会の開催について、日本での誘致を提案した中原市五郎に反対して血脇守之助が記述した「次回国際歯科医学会議を日本に開催せんとする希望に対する意見書」の概要について述べた。

昭和初期の社会的事情から時期尚早というだけでなく、中原が歯科医学校を中心に教育機関から呼びかけた提案に、歯科医師会長血脇が待ったをかけたのではないかと想像される。

文 献

- 1) 日本歯科医師会歯科医事衛生史編纂室編：歯科医事衛生史 後巻、日本歯科医師会、東京、1958、594-597
- 2) 東京都歯科医師会編著：東京都歯科医師会七十年史、口腔保健協会、東京、1968、178-237
- 3) 東京歯科大学百周年記念誌編纂委員会：東京歯科大学百年史、東京歯科大学、千葉、1991、750-752
- 4) 加藤増夫：近代歯学史と神奈川、神奈川新聞社出版局、横浜、1990、81-85
- 5) 森山徳長、高添一郎：草創期のFDIおよび万国歯科医学会と日本歯科界先駆者たちとの関係について、歯医史、10(2)、106-107、1983
- 6) 榊原悠紀田郎：歯記列伝、クインテッセンス出版、東京、1995、79-84、103-107